熊日1968.05.15

水俣病は叫ぶ

（18）

一本の小ビン

困苦と執念の六年

片隅に眠るナゾのカギ

熊大医学部公衆衛生学教室―その片ズミに小さなビンがあった。三十六年ごろのこと。大事そうに密封されたまま、ほこりをかぶっていた。だれも注意の目を向けなかった。

当時、熊大の原因追究は行き詰まっていた。食内（食品衛生調査会）が解剖結果から有機水銀中毒であることを指摘、その後内田（生化学）入鹿山（衛生）両教授が水俣湾内の魚介類から有機水銀を単離結晶化することに成功したが、工場排水による水俣病のことなど、きれいさっぱりと忘れ去っていた。

さまざまな異説に中和されて、厚生省の諮問機関である食品衛生調査会 水俣 食中毒 部会（委員代表、醍醐隼之熊大学長）が出した答申（三十四年十月。食中毒の原因は有機水銀が重要視されるとの内容）すら疑いの目で見られ、原因追究は空中分解寸前にあった。アセチレンを使ってのアルデヒド生産はやがて中止するという話も一月である。

いろいろのテストによって魚介の中にある有機水銀とほぼ同じものとみられた。入鹿山教授は思い返して再び工場の中に目を向け、ポンプ室内側のドロの採集を続けた。しかし、そのこ採取したドロには全然反応が出ない。あとでわかったことだが、このとき浄化そう清掃のため、ダイレクトに流された廃水中の有機水銀がポンプ室内側の泥中にたまったものらしい。手がかりは失われたかに思えた。

その直後、入鹿山教授らのグループの一員として工場排水を追究していた潮辺憲綱教授は定年退官の時を迎えた。同教授はその最終講義で、やむなく研究を離れるに当たって工場側に次のように訴えた。

「われわれは、アセトアルデヒドを生産する酢酸工場以外に原因物質を出したところはないと考える。そこだけが、検査の手がのびなかった唯一の盲点なのである。ナゾを解くカギは、このあたり以外に潜んでいるとは思われない。しかし、製造工程、廃水処理にかの存在に気がついたのである。

"水俣酢酸工場水銀スラッジ"まごうことなく、レッテルにそうしるされていた。スラッジとは泥状物質のことである。まだ患者がつぎつぎに発生していた三十四年八月と三十五年十月に酢酸工場反応管から直接採取したものであった。黒かっ色のドロドロの物質。入鹿山教授の分析が始まった。有機水銀が検出された。これが前回ふれた白色の結晶体である。

幸運―という以外にことばがあるとは思えない。だれかそそっかなりの改善が払われた現在、当時有機水銀がどの程度出たかを調べるよすがとてあるまい。われわれとしては、当時の酢酸工場の担当者に率直にお尋ねする以外に、道はないのである」

明らかな敗北感が読み取れる。長年の研究の結果がこうした形をとらねばならなかった科学者としての屈辱感は、いかばかりであったろうか。しかし、工場側の反応はなかった。

―何という幸運だろうか。だれかが教室のスミにある小さなビンたろう。

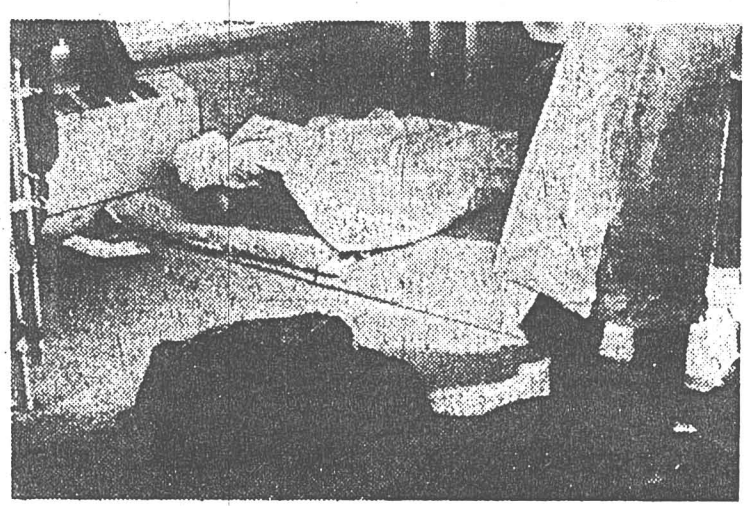
実をいえば、この小ビンのほかにも若干の同じ水銀スラッジがあった。しかし、入鹿山教授らはそれを入手した当時、有機溶媒に溶ける物質が含まれていることはわかったが、結晶として取り出すことはできなかった。

しい人間がしまい忘れた一本の小ビンが残っていたおかげで、真因がつきとめられたのだ。そして、入鹿山教授が三十六年一月に百間ポンプ室内側泥土から有機水銀反応を見つけたことが、一つの証左となって生きてきたのである。

しかし、これほど重要な問題の成否が、この髪の毛ひとすじほどの偶然にかかっていたことに、私たちは空恐ろしいものを感ずにはいられない。この小ビンがなかったら、水俣病の真因は永久にナゾのベールをかぶったままであっル水銀であることを確かめた。

研究班が生まれて六年目。長い戦いであった。困苦に満ちた年月であった。この間に投入されたエネルギーは膨大なものであった。有機水銀という単一の原因があり、患者の症状もひったりという、比較的因果関係の簡単な公害病でさえ、こうなのだ。人が死なない程度の、長期にわたって生活環境を低下させる多くの公害が、あるいは原因不明のまま見のがされているのではないか。私たちはこの水俣病の原因追究の過程をふり返ってみて、背筋が寒くなる思いをしたのである。

こんどは実現だった。二通りの方法で結晶化したあとA、B二つの結晶が同じものであることを確かめた。さらにこれを赤外線吸収分析、元素分析、水溶性、水蒸気蒸留にさいしての留出性、酸、アルカリで処理した場合の安定性などをテスト、間違いなく塩化メチ



湯の児病院にいる胎児性水俣病の子どもたち。ウロコ状の白い結晶体がこの子らを悲惨な運命に導いた